

待つこと

荒木 康子(福島県立美術館学芸員)

今回、光栄にも「國府理の仕事と仲間たち展」への出品のお誘いをいただいた。しかし実は迷っていた。喉に刺さった魚の骨のような、いまだ呑み込めない、消化しきれていない出来事があり、参加したいがどう書けるだろうかと躊躇していたからだ。締切が過ぎて、おもむろにアートコートギャラリーの大場美和さんに相談した。彼女に後押しをしていただき、この機会にもう一度考えてみようパソコンに向かっている。

2010年の夏、私は初めて國府理さんにお会いした。勤務している福島県立美術館の夏の展覧会にヤノベケンジさんにご出品をお願いしていたが、その展示アシスタントとして来られた。《ジャイアント・トラヤン》の組み立てに、寡黙だが的確な指示を出していく國府さん。しかしその時、まだ私は、一人の美術家としての國府理さんには出会っていなかったとあってよい。

そして2011年3月11日の東日本大震災。美術館で何ができるだろうかと同僚たちと無我夢中で考え、その年の夏休み、「あそVIVA★びじゅつかん」を立ち上げた。分厚いコンクリートに守られた美術館内は放射線量が低い。子供たちが滞在できる場を館内に作ろうと考えたのだった。そんな時、國府さんからワークショップの提案をいただいた。「FUKUSHIMA Garden 福島の庭」。ここにその提案書をご紹介します。

ワークショップ概要：

作品本体は直径4mのパラボラアンテナ型の鉄製容器が架台に支えられており高さ1.2mに保持され、この容器内は軽量土壌(パーライト)、フィルター、土、砂の順に満たされている。来館した子どもにはその表面へ植物の種を撒いてもらう。(表面に指で軽く穴を掘ってもらって種を埋める。または撒く。)種を撒いた後に、じょうろで水を撒いてもらう。早い種類であれば3~4日で発芽するので、その様子を観察する。そのまま成長を観察するか、撤去の必要があれば、発芽した植物を紙製の移植用ポットに採取して持ち帰ってもらう。

ワークショップ開催意図：

何もない地面に新しい生命が始まる瞬間を視線の高さに間近に見ることで、未来への希望のようなものを感じてもらいたい。また、発芽までの時間や、発芽後の成長には数日間必要とされるため、期待を胸に待つこと、その成長を楽しみにそこに足を運ぶことが、少しでも気持ちに安らぎをもたらすことになればと思います。

特記事項：

1. 植物の成長には通気と日照が必要です。屋内の場合、エントランスホールでくらいの空間が適切かと思えます。
2. 作品本体と軽量土壌(パーライト)、フィルターは京都から軽トラックで一度に運べますが、土、砂などは放射線量が基準値以下のものを現地あるいは近隣県から調達する必要があります。

前年にアートコートギャラリーで展示された《Desert Garden 砂漠の庭》の写真が、そこには添えられていた。機能性とデザイン性が突き詰められた美しい形を持ったパラボラアンテナを、庭にしてしまおうという発想。そこに小さな可愛らしい植物が、新たな成長の物語を紡ぎ出すというロマン。心を惹かれた。そして何より嬉しかった。これから福島がどうなっていくかまだまだ見えていなかった時期に、小さき者たちの逞しさは、國府さんが言うように「希望」や「気持ちの安らぎ」を導き出してくれるだろうことは、とてもよく理解できた。

しかし、私には引っかかることがあった。「土」である。福島で放射線量の低い土を調達することはかなり難しいと思った。福島で実現できない無念。加えて、國府さんは意図していなかったとしても、参加者、鑑賞者に「植物」が「農作物」を連想させ、放射能の問題へとマイナス方向にループしていく可能性がないとはいえない。そういう時期だった。國府さんの本当の意図が福島の人にきちんと伝わるだろうか。そんな心配が頭をよぎった。その後、何度か國府さんとメールのやり取りをした。そのいくつかは何故か行方不明なのだが、辿ってみると、私はそのことを正直に國府さんに伝えている。そして「たしかに、特記事項として土のことについて書いてしまったこととお送りしてから気になっていたのですが、やはり、私が考えている以上にそちらでは慎重にならなければならない問題なのですね。」というお返事をいただいた。さらにその後「だからこそ、この作品が、その問題の中ではある重要な文節として果たす役割があるのではと思えたのです。」とある。私も「確かにそう私も思います。いろいろなことが、その意味や役割を厳しく問われているように思います。」と答えている。

結局、こうしたやり取りの後、このワークショップは実現せずに終わった。しかし翌年2012年の秋、福島空港で開催された「福島現代美術ビエンナーレ」に《空の庭》という作品として、進化した形で展示され、ほっとした思いで作品を拝見したのを思い出す。でも私自身の中では、あの時のことがずっと喉に刺さっていた。

冒頭で「いまだ呑み込めない」と書いたのは、私が後悔と反省を引きずっていたからだ。もう少し丁寧に、深く、國府さんとこの作品について話しをすることができたのではないだろうか。時間をかけてお互いの考えや気持ちを率直に伝え、確かめ、一緒に考えることができたのではないか。当事者と非当事者、福島にいる者と外にいる者。この心の壁は、なかなかやっかいなものだと思うけれど、どうしようもなく厳然と存在する。結果としてこのワークショップが実現できなかったとして、お互いのこうしたズレをもう少し前向きにポジティブに認識するプロセスを踏めたのではないか。そういう後悔と、奥にある大きな問題に真摯に向き合うことから逃げていなかったかという反省が、自分の中に今でも交錯している。

國府さんのコンセプトには「時間」が織り込まれている。「待つこと」も大きな役割を果たしている。あらためて提案書を読み直して気づいた。時間とともに《福島の庭》の意味も変化していく。私たちにとって「待つこと」は試練だが、費やされるのは無意味な時間ではないだろう。國府さんが残していかれた種は重い。しかし、喉に刺さった骨の違和感とともに、この種の芽生えをゆっくり待ってみたいと思う。